

「ソーラップチプト」

明治の作家、国木田独歩の『空知川の岸边』という小品があります。北海道移住を志した独歩は、1895年、土地を得るために来道し、当時の日本最北の駅であった「空知太」駅に降り立ちました。この作品には、『武蔵野』で名を残した独歩得意の自然描写の筆致で、当時の鬱蒼とした原生林のたたずまいが活写されています。

「空知太」の地名は、アイヌ語の「ソーラップチプト」の音を写したものです。もちろん「ソーラップチ」は「滝を下る川」、空知川のこと。「プト」は河口や川の合流点を意味し、空知川が石狩川に合流する地点が「ソーラップチプト」なのです。今、「空知太」の地名は、空知川の南側に残り、行政的には砂川市の範囲です。しかし、その対岸、主要河川の合流点という要衝を押さえて造られた町に、「ソーラップチ」を意識した「滝川」の名が付けられたのでした。

「ソーラップチ」「空知」「滝川」と並べてその由来をたどると、アイヌ民族の土地・文化が和人によって奪われ、作り変えられていった歴史が浮き彫りになってきます。

『空知川の岸边』では、独歩が獲得しようとした土地の自然は描かれていますが、それまでそこに生きてきた人々とその歴史は、ことさらに無視されています。彼は当時、東京の一番町教会に通い、すでに植村正久から洗礼を受けていました。北海道移住を夢見た独歩は、内村鑑三の紹介で札幌農学校教授の新渡戸稲造に相談、土地の入手について便宜を図ってもらったといえます。キリスト教は、北海道開拓の推進者の側にはっきりと立つものでした。

私自身、「そらち」の名を負い、この北海道の地で牧師として居ることに、重い意味を覚えざるを得ません。

さて、やはりその「ソーラップチ」の名を負う滝川二の坂伝道所の歩みは、私個人にとっても幾重にもつながり深いものです。

初代の宮島利光牧師は、私が小学生の頃の教会学校の先生でした。開設まもない「滝川本町伝道所」に宮島先生を訪ねて床の傾いた建物に泊めてもらったこと、また私が旭川の教会に赴任直後に「滝川二の坂伝道所」の献堂式が行われた際、各地から駆けつけた人々の数の多さに北海教区の「連帯」の意味を教えられたことなどを思い出します。

5年前、札幌北部教会に転任してきたときには、教会の年間予算に滝川二の坂伝道所への献金が組み入れられているのに驚きました。決して十分な額ではありませんが、教会としてのきずなを大切に受け止めています。

この原稿を書いている今日、滝川二の坂伝道所から北部教会宛にリンゴが一箱届きました。「伝道所がオーナーとなっているリンゴの木の収穫の一部を今年も送ります」との手紙が添えてあります。「ソーラップチプト」の地の歴史のもたらした実りを、どのように味わうべきでしょうか。

(久世そらち)